

## 「愛の絆」

### ヨハネの手紙 — 4章 19～21節

日本基督教団滝野川教会牧師・聖学院みどり幼稚園チャプレン 東野尚志

「創立 30 周年を覚えて」。今日は、この主題で行うシリーズ礼拝の 10 回目、ということになります。全体で 13 回のシリーズです。来週の水曜日まで、今日を入れてあと 4 回、シリーズ礼拝が続くこととなります。大学の創立 30 周年を覚えてということですから、これまでのシリーズ礼拝の中では、今から 30 年前、学生の人たちはまだ生まれていない大学創立当時の社会的な状況を振り返ったり、この 30 年の日本と世界の変化をたどったり、その中で、聖学院大学が刻んできた歩みを振り返ったり。いろんな仕方で、30 周年を記念する言葉が語られてきました。30 年というのは、通常、one generation とも言われますから、30 年経てば、世代が代わるということにもなります。聖学院大学に連なる教職員の方たちの顔ぶれもずいぶん変わったのだらうと思います。創立当初からの関係者の訃報を聞くことも多くなりました。

ジェネレーション・ギャップという言葉もあるように、30 年経てば、日常生活で使っている言葉も変化していきます。同じ日本語で話しているはずなのに、世代が違えば言葉が通じないということも起こります。私たちが今、礼拝で使っている聖書は、新共同訳聖書といます。この聖書が最初に出版されたのは、1987 年です。聖学院大学創立の 1 年前ということになります。そして、もう間もなく、予定では二ヶ月後の 12 月には、新共同訳聖書の改定版である新しい翻訳の聖書、聖書協会共同訳という聖書が出版されることになっています。日本で聖書の翻訳・出版をしている日本聖書協会は、大体 30 年ごとに新しい翻訳の聖書を出してきました。文語訳聖書から口語訳聖書に変わり、新共同訳聖書、そして、31 年を経て、聖書協会共同訳聖書が出るのです。もちろん、30 年ごとに新しい翻訳の聖書が出るとしても、聖書の中身そのものは変わりません。翻訳の言葉は変わっても、神の言葉そのものが変わることはないのです。聖学院大学もまた、30 年経っても、100 年経っても、変わることはない神の言葉をいしえずとしながら、常に新しい歴史を拓いていくのだと思います。

今回、私もこのシリーズ礼拝の中に入れていただいて、何を語ろうかと考えました。そして、この 30 年の歴史を変わることなく導いてきた建学の精神、「スクールモットー」を、改めて、しっかり受けとめたい、そう思いました。

1 年生対象の「キリスト教概論」の授業の中で、最初の数回のうちに、私は必ず、聖学院大学の建学の精神を表した「スクールモットー」を取り上げることにしています。これは恐らく、私だけではなく、他の担当の先生方も授業の中で触れておられると思います。30 年前には生まれていなかった人たちも、聖学院大学の学生になったからには、この大学の「スクールモットー」としっかり向き合って欲しいと願っているのです。言葉としても覚えて欲しいと願っています。でも残念ながら、実際には、なかなかちゃんとは覚えてもらえません。それで、あるときから、春学期の期末試験において、はっきり予告して試

験問題の中で問うことにしました。聖学院大学の「スクールモットー」は何ですか、そして、あなたはこの言葉をどのように受けとめていますか、と問います。きちんと「スクールモットー」が書かれていれば、それについて何を書いても 10 点与えます。学生の人たちには、点取り問題だよ、確実に 10 点とってね、と言っています。それでも、遠慮深い人がいるので困ります。

ところで、この「スクールモットー」「建学の精神」を、私たちは、普段から、いろんなところで、目にしているはずで、チャペルニュースの中にも、毎回、記されています。表題の左側、大学の校章、エンブレムの下に小さく書かれています。「神を仰ぎ、人に仕う」とあります。昨年までは、この言葉が、「キリスト教概論」の教科書の書名にもなっていました。今年の 4 月に改定版が出て、今年度からは改定版を使っています。改定版は「永遠の言葉」という題名になりました。まさに、世が移り変わり、人の使う言葉が変わっても、永遠に変わることのない神の言葉を意味します。その変わることのない神の言葉が、人となって、この地上に宿られ、十字架にかかって、その命を犠牲として、私たちの罪の贖いを成し遂げてくださいました。人と成られた神の言葉、イエス・キリストを指し示すようにして、「永遠の言葉」という表題を掲げたのだと思います。

以前の教科書の書名、つまり、聖学院大学の「スクールモットー」である「神を仰ぎ、人に仕う」という言葉も、実は、永遠の言葉であるイエス・キリストが語られた教えがもとになっているということは、ご存じの方も多いと思います。ある律法の専門家が、主イエスを試そうとして、律法全体の中で一番大事な掟は何か、と尋ねました。それに対して、主イエスは、答えて言われました。「『心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい。』これが最も重要な第一の掟である。第二も、これと同じように重要である。『隣人を自分のように愛しなさい。』律法全体と預言者は、この二つの掟に基づいている」。律法の中にどんなにたくさんの掟があったとしても、そのすべては、神を愛することと隣人を愛すること、この二つの愛の掟に集約される、主イエスはそのように教えてくださったのです。「神を仰ぎ、人に仕う」。どこにも、「愛」という言葉は使われていません。それが、この「スクールモットー」の優れたところかもしれません。主イエスが教えてくださった最も大切な掟を、私たちの現実の中で、分かりやすく言い換えたのです。

「神を愛する」とはどういうことか。それは、「神を仰ぐこと」、すなわち「神を礼拝すること」です。そして、「隣人を愛する」とはどういうことか。それは、「人に仕える」ことだと言うのです。「愛」という言葉は、うっかりすると、センチメンタルな言葉、美しい言葉のように受けとめられてしまうかもしれません。けれども、聖書が語る愛は、非常に具体的な行動を伴っているのです。先ほど、朗読していただいた聖書の個所の少し前に、このように記されています。「神は、独り子を世にお遣わしになりました。その方によって、わたしたちが生きるようになるためです。ここに、神の愛がわたしたちの内に示されました。わたしたちが神を愛したのではなく、神がわたしたちを愛して、わたしたちの罪を償ういけにえとして、御子をお遣わしになりました。ここに愛があります」。ここに愛がある。まさに、イエス・キリストの十字架を指し示すようにして、ここに、神の愛がはっきりと示されている、と言うのです。この主イエスの十字架に表された神の愛にこたえて生きる者は、神を愛し、神が与えてくださった隣人を愛して生きる。これもまた具体的な行動を伴います。「神を仰ぐ」、すなわち、神を心から礼拝し、「人に仕える」、隣人のために、手を差し伸べ、助けていく。それが、愛することだと言うのです。

そして、さらに大事なことは、神を愛することと隣人を愛すること。これが、決して、二つのバラバラの掟ではなくて、内的に深く結び合わされた愛の形だということです。だから、今日、御言葉は私たちに告げています。「わたしたちが愛するのは、神がまずわたしたちを愛してくださったからです。『神を愛している』と言いながら兄弟を憎む者がいれば、それは偽り者です。目に見える兄弟を愛さない者は、目に見えない神を愛することができません」。「兄弟」という言葉は「隣人」と言い換えてもよいのです。目に見えない神を愛し、神を礼拝することは、目に見える私たちの隣人を愛し、隣人に仕えて行くことの中に愛の実を結んでいくのです。私たちが真実に神を礼拝するとき、私たちは、隣人に仕えることへと促され、押し出されていきます。そのようにして、このキャンパスの中にも、全学礼拝において共に神を仰ぐ者たちが、お互いに仕えあい、助け合い、支え合いながら共に生きる交わりが生まれる。そして、そのようにして、互いに仕え合うことを学んだ者たちが、この社会へ出て、隣人に仕える愛を実践していくとき、この社会は神の愛を知るようになる。聖学院大学は、そのような働き人を社会へと送り出して来ました。そしてこれからも、そのような歩みを続けて行くのだと思います。この大学に連なる教職員、そして、学生の人たちがみんな、そういう愛の中身を作っていくのです。

それでは、お祈りをいたします。皆さんも手を止め、目を閉じて、私の祈りに心を合わせてください。

天の父なる神さま、新しい一日を感謝します。礼拝を通して、私たちに注がれるあなたの愛をしっかりと受けとめることができますように。そして、礼拝において、あなたを仰ぐことを通して、隣人を愛し、隣人に仕える勇気と力を与えられて、ここから遣わされて行くことができますように。30周年を迎えた聖学院大学のこれからの歩みを祝福してください。そして、ここで出会うすべての者たちを、あなたの愛によって、しっかりと結び合わせてください。主イエス・キリストの御名によって祈ります。アーメン。

2018年10月11日(木) 聖学院大学 全学礼拝シリーズ礼拝「創立30周年を覚えて」